

ラテン教父の総合研究

アフリカの司教殉教者キプリアヌス（4）

『主の祈りについて』——翻訳と注解——

Cyprianus, *De Dominica oratione*.

吉 田 聖

目 次

はじめに

I. キプリアヌス著『主の祈りについて』の翻訳

II. 注解：キプリアヌスとユダヤ人について

III. 参考文献

あとがきにかえて

はじめに

キプリアヌスの『主の祈りについて』という著作は251年の終わり頃から252年の始めにかけて書かれたらしい。『カトリック教会の一致について』（試訳済）執筆直後であったためか、「教会の一致」を願う心が漲っていて、随所に前の著作の考えがこだましている。その意味で「主の祈り」と「教会の一致」の両著作には密接な関連がある。今回、黙想用に工夫された翻訳を通して、彼の神学と霊性に深く裏打ちされた司牧・実践型の教えを味わい、少しでも実行に移していただければ幸いである。

I. キプリアヌス著『主の祈りについて』の翻訳

第1部 祈りについて

1. [神からの教訓]

愛する兄弟たちよ。福音の戒めは、神からの教訓にほかなりません。それは私達の希望を築き上げる基礎であり、信仰を強める支え、心を養う糧、行く手を導く舵取り、救いを得るための助けです。それは、この世にある信者の素直な心を神の御国へと、教え導くものです。

神はその僕である預言者達を通じて、多くのことを話し聞かせることをお望みになりました。しかし神がご自身の声をもって預言者に証言させられた神のことは、即ちおん子をもって語られたことは、いかに優れて偉大なことでしょうか。

それは到来する方（神）に道を整えることをお命じになるのではなく、神ご自身が来られて私達にその道を開き、示して下さっているのです。かつては心にもとめず、盲目であり、死の暗闇の中をさまざっていた私達は、今や恵みの光りに照らされて、指導者であり導き手である主によって、生命への道を進んでいけるようになったのです。

2. [霊と真理を伴う祈りの形]

主はその民の救いのために有益な勧めや戒めを与えられましたが、ほかに祈りの形についても、ご自身で示され、私達がどのように祈るべきかを教え諭されました。

私達のためにすべてを惜しまれなかった主は、私達を生かして下さるばかりでなく、その同じ慈愛をもって、祈ることも教えて下さいました。

こうして、おん子が教えて下さったとおりの言葉で私達がおん父に語りかける時、さらに聞き入れ易いようにして下さいました。主は予め「ほんとうの礼拝者達が、聖霊と真理に導かれて父を礼拝する時が来る」⁽¹⁾ こ

(1) ヨハ4、23

とを語られたが、彼によって聖とされた私達は霊と真理とを受けて、主の教えによって、霊と真理をもって礼拝することができるようになりました。

私達に聖霊をもお与え下さったキリストが下さった祈りほど、霊的な祈りがあるでしょうか？ 真理であるおん子とその口をもって伝えて下さった以上に、おん父に対するまことの祈りがあるのでしょうか？⁽²⁾

それゆえ、主が教えて下さったのと異なる仕方では祈るのは、ただ単に無知であるばかりでなく、罪でさえあります。というのもご自身がこう宣言しておられるからです。「あなたたちは神の掟を捨てて、人間の言い伝えを固く守っている」⁽³⁾。

3. [おん子のみ言葉]

愛する兄弟達よ。だから、師である神が教えて下さった通りに、祈ろうではありませんか？

神ご自身のみ言葉によって神に懇願することは、つまりキリストの祈りが神のおん耳許に届くことであり、愛と親しみをこめた祈りなのです。私達が自分の祈りをささげる時、おん父がおん子のみ言葉を認めて下さいますように！ 私達の心のうちに住まわれる主が、私達の声にも現存されまますように！

さらに、主をおん父に対する私達の罪の弁護者としていただいているのですから、⁽⁴⁾ 罪のゆるしを願う罪びととして、私達の弁護者の言葉を、そのまま用いるようにしましょう！ 主は「お前たちがわたしの名によって何かを父に願うならば、父はお与えなる」⁽⁵⁾ と言われたのですから、私達もキリストご自身の祈りによって祈るなら、主の御名によって願い求めることは〔何でも〕、一層効果的にいただくことができるのではないでしょう

(2) ヨハ 14, 6

(3) マタ 15, 6 ; マコ 7, 8 - 9 参照

(4) 1 ヨハ 2, 1 参照

(5) ヨハ 16, 23

か？⁽⁶⁾

4. [心からの、謙虚な祈り]

しかし、祈る時には言葉も願い方も規律正しく、穏やかで、慎み深いものでなければなりません。

神の眼前に立っているのだということを、考えるようにしましょう！ 姿勢も声の調子も、神〔のおん目〕を喜ばせるように！ 騒々しい声を張り上げるのは恥知らずな者のしるしであり、控え目な祈りをささげるのは慎み深い者にふさわしいからです。

また主はその教えの中で、密かに祈ること、隠れた場所でしかも自分の部屋で祈るように戒めておられます。⁽⁷⁾ このことは、つまり、神はどこにでもおいでになり誰の願いでも聞かれるし、誰をも見ておられること、さらにどんな隠れた場所でも、その最高のみいつをもって見透かしておられる、という信仰に一層よく当てはまるものです。

聖書にこう書き記されています：「わたしはただ近くの神であって、遠くの神ではないのか？ 人はひそかな所に身を隠して、わたしに見られないようにすることができようか？

わたしは天と地に満ちているのではないか？」⁽⁸⁾。さらに、神の目は到るところにあって善人と悪人とを見張っている」⁽⁹⁾ とあります。

また私達が兄弟として一つ所に集まって、神の司祭と共に「神のいけにえ」（聖体祭儀）を捧げる時にも、慎み深く規律正しくするように心がけなければなりません。落着きのない声で祈りをばら撒いたりしてはなりません。慎み深く神に捧げるべき願いを、騒々しい多弁で、神に投げつけたりしてはなりません。⁽¹⁰⁾

(6) ヨハ 14, 6 参照

(7) マタ 6, 6 参照

(8) エレミヤ 23, 23-24

(9) 箴言 15, 3

(10) マタ 6, 7 参照

神は声だけでなく、心を聞かれるかたであり、また人の思いを見通すかたでありますから、叫び声を上げて、促すことなどするべきではないのです。主は「なぜ、心の中で悪いことを考えているのか？」⁽¹¹⁾ と言って、このことを証明しておられます。

さらに別な箇所では「全教会は、わたしが人間の思いや判断を見通す者だということを悟るようになる」⁽¹²⁾ とも言われています。

5. [声ではなく、心で祈る]

列王記第1の書に記されているハンナこそは、教会が守り続けてきた事の典型です。彼女は騒がしい願い事ではなく、ただ黙って慎み深く、心の奥底で祈ったのです。祈りの言葉こそは口にしなかったが、信仰は明らかにし、声ではなく、心で語りかけたのです。

こうすれば、神は聞いて下さると彼女は知っていたのです。そして信頼をこめて祈り求めたので、願い事は効果的に叶えられたのです。聖書に「ハンナは心のうちで物を言っていたので、唇は動くだけで、声は聞こえなかったが、神はこれを聞きいれられた」⁽¹³⁾ とあるとおりです。

また詩篇にもこう書いてあります。「口を閉ざして、床の上で静かに自分の心に語りなさい」⁽¹⁴⁾。

さらに、聖霊はエレミヤによってこれと同じことを勧め教えて言っています「神よわたしは心のうちであなたを礼拝しなければなりません」⁽¹⁵⁾

6. [胸を打ち、憐れみを乞い願いつつ]

愛する兄弟達よ。神殿でファリザイ派の人と共に祈った徴税人がどのよ

(11) マタ9、4

(12) 黙2、23

(13) サムエル上1、13-19 参照

(14) 詩篇4、5

(15) バルク6、6 参照

うに祈ったかも、知っておいていただきたいと思います。彼はあえて目を天にあげることもせず、誇らしげに両手を広げて挙げることもせず、胸を打ちながら、わが身の罪を無言のうちに表明して神の慈悲の助けを哀願したのです。

他方、ファリザイ派の人は自分に満足していたし、自分は聖とされる値打のある者と思い込んでいたので、その通りに願ったのです。しかし、全く罪のない人はいないのですから、自分は無罪であるという確信のうえに、自分の救いの望みを掛けることは出来ませんでした。

かえって、自分が罪深い者であることを告白してへり下って祈った前者のほうが、へりくだって嘆願する者の聞き手である主に聞き入れられたのです。

このことについて、主はその福音の中で次のように記して言っておられます。「二人の人が祈るために神殿に上がった。一人はファリザイ派の人で、もう一人は徴税人だった。ファリザイ派の人は立って、心の中でこのような祈りをした。『神さま、わたしはほかの人たちのような、泥棒、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この税金取りのような者でもないことを感謝します。わたしは週に二度断食し、収入のすべてについて十分の一をささげています』。

ところが、徴税人は遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った『神さま、罪びとのわたしをあわれんでください』と。言っ
「おくが、神の御心になつた者とされて家に帰つたのは、この人であつた。あのファリザイ派の人ではない。だれでも高ぶる者は下げられ、へりくだる人は上げられるのである」⁽¹⁶⁾。

(16) ルカ 18, 10-14

第2部 主の祈り

7. [祈りの目的]

愛する兄弟達よ。聖書を読んでこれらのことを学び、どのように祈るべきかが分かってきたので、何を祈るかについても主が教えて下さったことを学ぶことにしましょう。

主は言われます。「だから、こう祈りなさい。『天にましますわれらの父よ。願わくは御名の尊まれんことを。御国の来たらんことを。御旨の天に行わるごとく地にも行われんことを。われらの日用の糧を今日われらに与えたまえ。われらが人にゆるすごとく、われらの罪をゆるしたまえ。われらを試みにひきたまわされ、われらを悪より救いたまえ』⁽¹⁷⁾。」

8. [神の民全体のために祈る]

何よりもまず、平和の博士であり一致の教師である主は、誰かが祈る時、個人個人が別々に祈ったり、自分のためだけに祈ったりすることを、お望みになりません。

私達は「天にまします、私の父よ」とか「私の日用の糧を今日私に与えたまえ」とか「自分の負い目だけがゆるされますように」と願うのではなく、「自分だけが試みに引かれず、悪から救われるように」と願うのでもありません。

私達の祈りは、公のものであり、共同のものであります。祈る時は一人の人のために祈るのではなく、民全体のために祈るのです。民全体はひとつなのですから。

私達に一致を教え、平和と和合を説かれた師である神は、すべての人をひとりで担われたように、一人のひとがすべての人のために祈ることを、お望みになりました。

この祈りの掟は、三人の青年が燃える炉の中に閉じ込められ、共に祈り、

(17) マタ 6, 9-13

精神を一致させ、心を一つにした時にも、守られていました。そしてこのことは、聖書がその場合彼らがどのように祈ったかを語り、私達も彼らのようになれるよう、祈る時に模倣すべき模範を示しているのです。

「そこで彼ら三人は、異口同音に賛美の歌を歌い、神を讃えた」⁽¹⁸⁾。

キリストはまだ祈ることを教えておられなかったにもかかわらず、彼らは異口同音に祈ったのです。それで、彼らの祈りに応じて、その言葉は役に立ち、効果があったのです。というのも、平和に満ちていて純粹で、しかも霊的な祈りは主に受け入れられるに相応しいからです。

主の昇天後の使徒たちも、弟子達と共に、このように祈ったということに、わたしたちも気付きます。「彼らは皆、婦人たちやイエズスの母マリア、またイエズスの兄弟たちと心を合わせて熱心に祈っていた」⁽¹⁹⁾。

ここでは、心を合わせ熱心に祈っていたとありますが、人々の心を一つにして一つの家に住ませる神は、祈りにおいて一致している人達だけを永遠の、神の住処（すみか）に迎え入れられるのです。⁽²⁰⁾

9. [天にましますわれらの父よ。]

愛する兄弟達よ。しかし、主の祈りの中には何と偉大な神秘が含まれていることでしょう！

これほど短い言葉のうちに、何と多くの、偉大なことを、簡潔にしかも霊的に豊かに、何事も見逃すことなく、私達の祈りと願いにおける天の教えの要綱のように集めたものが、他にあるのでしょうか？

主は言われます：「だから、こう祈りなさい『天にましますわれらの父よ』」⁽²¹⁾。神の恵みによって再び生まれ、そのみ許に帰った新しい人間は、まず最初に「父よ！」と言うのです。新しい人間はいまや、その子となっ

(18) ダニエル 3, 51 参照

(19) 使行 1, 14 参照

(20) 使行 2, 46 参照

(21) マタ 6, 9

たのですから・・・

主は言われます：「このかたは、自分の民のところへ来たが、その民はこのかたを受け入れなかった。しかし、このかたは、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた」⁽²²⁾。

それゆえ、主の御名を信じて神の子となった者は、神を自分にとって天にまします父と呼んで感謝し、自分は神の子であると公言することから始めなければなりません。さらに再生の時（洗礼式の時、始めて主の祈りを唱える習慣から）、唱える最初の言葉からして、直ちに地上の父・肉親上の父を棄てて、天にまします父のみを知り、かつ父として持つことを立証し始めなければなりません。

聖書に記されているように「彼はその父、その母について言った『わたしは彼らを顧みない』。彼は自分の兄弟をも認めず、自分の子供をも顧みなかった。彼らはあなたの言葉に従い、あなたの契約を守らなかったからである」⁽²³⁾。

主はその福音の中で、「地上の者を『父』と呼んではならない。お前たちの父は天の父おひとりだけなのだ」⁽²⁴⁾と戒めておられます。

そして父の死について知らせた弟子のひとりに向かって、主はこう答えて言われました：「死んだ者たちに、彼らの死者を葬らせなさい」⁽²⁵⁾。この弟子は自分の父が死んだと言ったのですが、信じる者のおん父は生きておられるのです。

10. [信じる者すべての父]

愛する兄弟達よ。私達は神を「天にまします父」と呼ぶことに気付いて、それを悟るだけではなく、さらに「われらの父」と結び付けて言うのです。

(22) ヨハ 1, 11

(23) 申命 33, 9

(24) マタ 23, 9 参照

(25) マタ 8, 22 参照

つまり信じる者の父、彼によって聖とせられ、霊の恵みによる誕生によって（洗礼の恵みによって）新たに神の子となりはじめた者の父なのです。

さらに、この言葉こそはユダヤ人を非難し、有罪の宣告を与えるものでもあります。彼らは始めに預言者によって告げられ、まず彼らの許に遣わされたキリストを軽んじて信じなかったばかりでなく、彼を残酷にも死刑に処したのです。

だから、彼らは今、神を自分の父と呼ぶことが出来ないのです。主はこう言われて、彼らを困惑させ、責めておられるからです：「君たちの父は悪魔であって、君たちはその父の欲望を満たしたいと思っているのだ。悪魔は最初から人殺しであって、真理をよりどころとしていない。彼らの内には真理がないからである」⁽²⁶⁾。

主はまた預言者イザヤによって怒りの叫びを上げて言われました：「わたしは子を養い育てた。しかし彼らは私にそむいた。牛はその飼い主を知り、ロバはその主人のまぐさおけを知る。しかしイスラエルは知らず、わが民は悟らない。ああ、罪深い国びと、不義を負う民、悪をなす者の末、墮落せる子らよ。彼らは主を捨て、イスラエルの聖者を侮り、これをうとんじ、遠ざかった」⁽²⁷⁾。

私達キリスト者が祈る時「われらの父よ」と唱える時、ユダヤ人にとっては咎めの言葉になっているのです。神はすでに私達のものとなり始められ、神を捨てたユダヤ人のものであることを止められたからです。

罪びとである民は神の子とはなれません。罪のゆるしが与えられた者にこそ、子という名も付けられ、永遠〔の生命〕が約束されることを、主ご自身こう述べておられます：「罪を犯す者はだれでも罪の奴隷である。奴隷は、その家にいつまでもいるわけにはいかないが、子はいつまでもいる」⁽²⁸⁾。

(26) ヨハ 8, 44

(27) イザヤ 1, 3-4

(28) ヨハ 8, 34-35

11. 「神の子として生きる」

しかし、神の眼前でこのように祈ることを私達にお望みになった主は、さらに私達が主を父とよび、キリストが神の子であるのと同じように、私達をも神の子と名付けることをお望みになりました。主のゆるしはなんと大きく、私達に対する主の評価と豊かな慈しみは、なんと大きいことでしょう！

主ご自身がこのように祈ることを私達にゆるされない限り、私達の誰ひとりとして祈りの中でこの称号（父）をあえて用いる者はないでしょう。

それゆえ、愛する兄弟達よ。神を「われらの父」と呼ぶ場合、私達は神の子として振る舞わねばならないということも承知し、心に銘記しておいてもらいたいです。私達が「父である神」に自らの喜びを見出すのと同様に、神もまた「私達」に喜びを見出されるためです。

主が私達のうちに住まわれることを人々が知るようになるため、「神の神殿」として生活しましょう！。⁽²⁹⁾ 霊的な人となり、天に属する人となり始めた私達は、霊的なことや天上のこと以外のことを考えたり、行ったりしないために、自分の言動を聖霊から引き離さないようにしましょう！

主ご自身もこう言っておられます：「わたしを尊ぶ者をわたしも尊び、わたしを卑しめる者は、軽んぜられるであろう」⁽³⁰⁾。

さらに使徒聖パウロもその書簡の中で、こう述べています：「あなたたちは皆、（高い）代価を払って買い取られたのです。ですから、その体で神をほめたたえなさい」⁽³¹⁾。

12. 「御名の尊まれんことを。」

次に、私達は「御名の尊まれんことを」と唱えます。これは私達の祈り

(29) 1 コリ 3, 16-17 参照

(30) 1 サムエル 2, 30

(31) 1 コリ 6, 19-20 参照

によって神が聖とされることを神に願うのではなく、神の御名が私達の中で尊ばれるように、主に願うのです。

ご自身が（他者を）聖とする神でありながら、誰かによって聖とされることがありますでしょうか？

神ご自身がこう言われています：「あなたがたは聖なる者とならなければならぬ。わたしは聖なる者である」⁽³²⁾。

洗礼において聖とされた私達は、すでに始まったこの聖なる状態を堅持していくように望み、願うのです。

しかも毎日、毎日このことを懇願するのです。毎日過ちを犯す私達は、絶え間ない聖化によってその過ちを清めるために、日々の聖化がどうしても必要です。

神の恵みによって私達に与えられたこの「聖化」とは何かについて、使徒聖パウロは次のように述べています：「淫らな者、偶像を礼拝する者、姦通する者、男娼、男色者、泥棒、強欲な者、酒におぼれる者、人を悪く言う者、詐欺師は、けっして神の国を継ぐことができません。あなたたちの中にはそのような者もいましたが、主イエズス・キリストの名とわたしたちの神の霊によって洗われ、聖なる者とされ、正しい者とされています」⁽³³⁾。

聖パウロは、私達の主イエズス・キリストの御名により、また私達の神の霊によって、私達はすでに聖なる者とされていると言っています。

この聖化が自分達のうちに続くように、私達は祈るのです。

そして、審判者でもある主が、すでに癒され生かされた人に、さらに悪いことが起こらないよう、再び罪を犯さないようにと戒めて下さるので、⁽³⁴⁾ 私達は祈りの中で絶えずこのことを懇願するのです。

(32) レビ 11, 44 ; 20, 7 参照

(33) 1 コリ 6, 9-11

(34) ヨハ 5, 14 参照

神の恵みによっていただいた聖化と活性化を、私達が神ご自身のご保護のもとに保持していけるように、昼夜を分かたず願い求めるのです。

13. 「御国の来たらんことを。」

（主の）祈りは、「御国の来たらんことを」と続きます。「御名が私達のうちに聖とされるように」と祈るのと同様に、「神の国が私達のもとに現存するように」と願うのです。

しかし、神が支配しない時などあるのでしょうか？ あるいは、すでに存在したものの、けっして存在することを止めないものが、神のもとで、いつ始まるというのでしょうか？

私達が願うことは、神から約束されたキリストの御血とご受難によって獲得された「私達の国」が到来するようということなのです。そしてこの世で（主に）仕えてきた私達は、後には支配するキリストと共に支配するようになるのです。

このことは主ご自身が約束してこう言っておられる通りです：「さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい」⁽³⁵⁾。

しかしながら、愛する兄弟達よ。私達が毎日その到来を待ち望んでいるかたであるキリストご自身、神の国であり得るわけです。私達のもとへの主の到来が速やかに実現するように待ち望んでいるのです。というのも、主こそは復活であり、⁽³⁶⁾ 主において私達も復活するだけでなく、主こそは神の国であると見做され、主において私達もまた支配するものとなるからです。

しかし、私達は神の国、即ち天の国を熱心にもとめなければなりません。地上の国もあるからです。すでにこの世を捨てた人は、この世とその誉れ

(35) マタ 25, 34

(36) ヨハ 11, 25 参照

よりも偉大であり、それゆえに、神とキリストに身を捧げた人は地上の国ではなく、天の国を熱望するのです。

しかし、絶え間なき祈りと懇願はぜひとも必要です。最初に約束をうけたユダヤ人が失ってしまったように、私達も天の国を失うことがないようにするためです。

主は次のように明確に語っておられます：「(言っておくが、)いつか、東や西から大勢の人が来て、天の国でアブラハム、イザアク、ヤコブとともに宴会の席に着く。でも、もっとも天の国に入るはずの者は、外の暗闇に追い出され、そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう」⁽³⁷⁾。

主がここで示しておられること、それは——つまり、ユダヤ人も「神の子」であり続けた間は「その国の子」であったが、彼らの間から(神に対する)「父」の名が消滅した時、「その国」も消滅したということです。

ですから、祈りの中で神を父と呼び始めた私達キリスト者は、神の国が私達にも到来するように祈るのです。

14. [御旨の天に行わるごとく地にも行われんことを。]

さらに付け加えて、「御旨の天に行わるごとく地にも行われんことを」と唱えます。これは「神がお望みになることを、神がなさいますように」ということではなく、「神がお望みになることを私達が実行出来ますように」ということです。

というのも、神が行おうとお望みになることを、妨げることが出来る者がいるのでしょうか？

私達こそ、思いや行いをもって神に従うのを悪魔に邪魔されていますので、私達のうちに神の御旨が行われるように祈り願うのです。

神の御旨が私達のうちに行われるためには、神の御旨、すなわち神の助けと保護がどうしても必要です。誰も自分ひとりの力だけで強い者はいな

(37) マタ 8, 11-12

いばかりか、神の慈しみと憐れみのおかげで、安全でいられるのです。

ですから、主ご自身も担っていた人間の弱さを示しながら、こう言われました：「父よ、できることなら、この杯を過ぎ去らせて下さい」⁽³⁸⁾。

しかし、弟子たちが自分の意志を神の御旨としてしまわないように、彼らに模範を示し、付け加えて言われました：「でも、わたしの望みどおりではなく、お望みどおりになさいますように」⁽³⁹⁾。また別な箇所ではこう言われました：「わたしが天から降って来たのは、自分の意志ではなく、わたしをお遣わしになったかたの意志を行うためである」⁽⁴⁰⁾。

おん子がおん父の御旨を行うために従順であったならば、そのしもべ(私達)はなおさらのこと、主人の意志に従順であるべきではないでしょうか？

そこで、使徒聖ヨハネはその最初の書簡の中で、神の御旨を行うべきことを教え、促して、こう述べています：「この世もこの世のものも、愛してはいけません。この世を愛する人がいれば、おん父の愛はその人の内にありません。なぜなら、すべてにこの世のもの、肉欲、目の欲、生活のおごりは、おん父から出ないで、この世から出るからです。この世もこの世の欲も、過ぎ去って行きます。しかし、神の意志を行う人は永遠に生き続けます」⁽⁴¹⁾。

永遠に生きることを望む私達は、ですから、永遠にまします神の御旨を行わなければならないのです。

15. 〔神の御旨を行うとは〕

ところで、神の御旨とは、まさにキリストが自ら行い、教えた事にほかなりません。すなわち、生活態度においては謙虚に、信仰は揺ぎなく、言葉は慎み深く、行いは正しく、行動は憐れみに満ち、振る舞いは規律正し

(38) マタ 26, 39

(39) マタ 26, 39

(40) ヨハ 6, 38

(41) 1 ヨハ 2, 15-17

く、自ら不正なことをせず、なされた不正は耐え忍ぶことが出来るのです。

また兄弟と平和を保ち、心をこめて神を愛し、⁽⁴²⁾ 神であることを敬いながらも、父であることを愛し、さらに私達以外の何者も優先されなかったので、私達もキリスト以外の者を優先することなく、キリストの愛に引き離されることが出来ないほど愛着し、その十字架のもとに勇敢にしかも信頼をこめてたたずむのです。

そして、主の御名とその名誉のために戦いが生じる時は、信仰宣言する言葉には首尾一貫性をもたせ、尋問においては論争する勇気を、死を迎えては栄冠を得る忍耐を示すのです。

これこそキリストと共同の相続人の望むところであり、⁽⁴³⁾ これこそ神の命令を実行することであり、これこそ父の御旨を果たすことであります。

16. [人間：天と地において]

さらに、私達は神の御旨が「天と地において」行われることを願うのですが、それは私達の安全と救いがこの両方に関係しているからです。

というのも、私達は地よりの肉体と天よりの精神を持っていますので、私達自身が天と地でもあるのです。そしてこの両方において、つまり肉体と精神においても、神の御旨が行われるように祈るのです。

肉体と精神の間には戦いがあります。つまり精神は天のことで、神のことを求める一方、肉体は地上のことで、世俗のことを求め続けるため、私達は望むところを行わないほど、肉体と精神の間には相互に対立している日々の衝突があるのです。

ですから、神の力と助けによって、両者の間に調和が保たれるように祈るのです。こうしてこそ、精神においても肉体においても、神の御旨が全うされ、神によって再生した靈魂は（完全に）保たれるのです。

(42) マコ 12, 30 参照

(43) ロマ 8, 17 参照

使徒聖パウロはこのことを、次のように明確に述べています：「肉の望むところは、霊に反し、霊の望むところは肉に反するのです。肉と霊が対立し合っているのです、あなたたちは、自分のしたいと思うことができないようになっているのです。しかし、肉の行う業は明らかです。それは、姦淫、売春、猥褻、好色、偶像礼拝、魔術、人殺し、敵意、争い、そねみ、怒り、挑発、欺瞞、不和、異端、ねたみ、泥酔、暴飲暴食、その他のこういったたぐいのものです。このようなことを行う者は、神の国を受け継ぐことはできないのです。

これに対して、霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です」⁽⁴⁴⁾。

ですから、日々の、しかも絶えざる祈りによって、このこと、つまり天においても地においても神の御旨が行われるように懇願するのです。神の御旨とは、地上のものが天のものに席を譲り、霊的で神的なことがまさることなのです。

17. 「地球全体を救う地の塩」

愛する兄弟達よ。このこと（この願い）は、次のように理解することも出来ます。主は敵を愛し、迫害する者のためにさえも祈るように勧め諭して下さったので、⁽⁴⁵⁾ まだ地上に属していても天のものとなり始めていなかった人々のためにも、神の御旨が——すなわち、キリストが人間を救い新たに実現して下さった神の御旨が行われるようにと、私達は祈るのです。

主は弟子達のことを、もはや「地」とは呼ばれず「地の塩」と呼ばれ、⁽⁴⁶⁾ また使徒聖パウロも「最初の人はずでできた地の者であり、第二の人は天

(44) ガラ 5, 17-23

(45) マタ 5, 44 参照

(46) マタ 5, 13 参照

の者である」と呼んでいます。⁽⁴⁷⁾

善人にも悪人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる父なる神に似た者とならなければならない私達は、⁽⁴⁸⁾ キリストの戒めに従って、すべての人の救いを祈り願うのは、相応しいことです。

こうして、神の御旨が「天において」——つまり私達のうちに、その信仰によって——行われ、私達はそれによって天の者となったように、「地において」も——つまり未だ信じたくない人々のうちにも——神の御旨が行われるようになり、彼らも最初の誕生による地の者である状態から、水と聖霊によって、⁽⁴⁹⁾ 天の者と生まれ変わり始めるようになるためです。

18. [われらの日用の糧を今日われらに与えたまえ。]

この祈りを続けていくと、「われらの日用の糧を今日われらに与えたまえ」と祈ります。

これは、霊的な意味でも、あるいは、文字通りの意味でも理解できます。どちらの意味にとっても、神からの利益の点で救いに役立つものです。

キリストは命のパン（糧）です。このパンはすべての人のものではなく、私達のものです。

理解し信じる人々の父であるからこそ、神のことを「われらの父」と呼ぶように、その御体に触れる私達のパンであるからこそ、キリストのことを「われらのパン（糧）」と呼ぶのです。そしてこのパンが毎日私達に与えられるようにと祈るのです。それはキリストのうちにある私達が救いの食物として毎日聖体を拝領するのですが、何か大きな罪を犯して（拝領を）差し控えさせられて、天のパンを拝領することを禁じられ、キリストの御

(47) 1 コリ 15、47 参照

(48) マタ 5、45 以下参照

(49) ヨハ 3、5 参照

体から引き離されてしまうことがないようにと祈るのです。

主ご自身もこう述べておられます：「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、この世を生かすための自分の肉のことである」⁽⁵⁰⁾。

このパンを食べる人は永遠に生きると主は言われたのです。だから、その御体に触れ、相応しく聖体拝領する人が生きるということは明らかです。逆に、差し控えさせられてキリストの御体から分かれたれている間に救いを失うことのないようにと祈り、かつそのことを恐れなければなりません。

主はこのことを次のように警告して言われます：「人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、君たちの内に生命はない」⁽⁵¹⁾。そこで、私達は「われらのパン（糧）すなわちキリスト」を毎日与えられるようにと祈るのです。

キリストのうちにとどまり、生きている私達が、キリストの御体とその成聖（の恵み）から離れることのないためです。

19. [必要なものを、ただ今日一日のために]

このことは次のように理解することも出来ます。この世を捨て、その富も栄華も、霊的な恵みに信頼して放棄した私達は、ただ食物と生活必需品のみを願うのです。

「自分の持ち物をいっさい捨てないならば、あなたたちのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない」⁽⁵²⁾ と主が教えて言われた通りです。

キリストの弟子となり始め、その師のみ言葉に従って、持ち物をいっさい捨てた者は、ただ一日の食物を願うべきであり、それ以上長きにわたる望みを表すべきではありません。

(50) ヨハ 6, 51

(51) ヨハ 6, 53

(52) ルカ 14, 33

主ご自身、再び命じてこう言われます：「明日のことまで思い悩む必要はない。明日のことは明日悩めばよいのだ。その日の苦労は、その日だけでじゅうぶんである」⁽⁵³⁾。

明日のことを思い悩むことを禁じているキリストの弟子は、自分のためにその日一日のための生活必需品を願うのが正しいことなのです。神の国のすみやかな到来を願いながら、この世に生き長らえることを願うのは自己矛盾となるからです。

使徒聖パウロも私達の希望と信仰を堅固なものに形作り、鍛えあげようとして、つぎのように戒めています：「わたしたちは、何も持たずにこの世に生まれ、世を去るときは何も持って行くことができないのです。食べる物と着る物があれば、わたしたちはそれで満足すべきです。金持に成ろうとする者は、誘惑と悪魔の罠、無分別で有害なさまざまの欲望に陥ります。その欲望が、人間を滅亡と破滅に陥ります。金銭の欲は、すべて悪の根だからです。金銭を追求するうちに信仰から迷い出て〔難破して〕、さまざまのひどい苦しみに心突き刺された者もいます」⁽⁵⁴⁾。

20. [天に宝を積む]

富は軽んじなければならぬばかりでなく、危険なものであると、彼〔聖パウロ〕は教えています。富には人の心をくらませて、ひそかに欺き陥れる悪の根があるというわけです。

この世の富を追求し、そのあふれるばかりの豊かな収穫を誇る金持ちの青年の愚かさを、神は咎めてこう言われます：「愚か者。今夜、お前は死なねばならない。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか」⁽⁵⁵⁾。

(53) マタ 6, 34

(54) 1 テモ 6, 7-10

(55) ルカ 12, 20

愚か者は自分の収穫を喜び、豊かな生活の糧を思いめぐらしていたが、その夜、彼は死を迎えることになり、命がなくなってしまうのです。

これとは逆に、持ち物いっさいを売り払って貧しい人に施し、天に宝を蓄えた者は完全な者となり、完成者となると主は教えておられます。⁽⁵⁶⁾

また、主のあとに従い、そのご受難の榮譽に做うことができるのは、私有財産の網に巻き込まれることなく、よく準備を整えた者、すでに主に捧げて自らの所有物から解放され、自由になって主に従う者だけなのです。

このために、わたしたち各々がふさわしい準備を整えることができるように、祈ることを学び、祈りの内容から私達がいかにあるべきかも知るようになければなりません。

21. [まず神の国を、その他のことはその次に]

正しい人が日用の糧に事欠くというようなことはあり得ないことです。聖書もこう言っているからです：「主は正しい人を飢え死にさせることはない」⁽⁵⁷⁾。

また「私はむかし年若かった時も、年老いた今も、正しい人が捨てられ、あるいはその子孫が食物を乞い歩くのを見たことがない」⁽⁵⁸⁾ とあり、さらに主は次のように約束して言われます：「だから、『何をたべようか』、『何を飲もうか』、『何を着ようか』などと言って、思い悩んではならない。それはみな、異邦人がせつに求めているものだ。あなたたちの天の父は、これらのものがみな必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国とその正さ〔御心にかなう生活〕を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて加えて与えられる」⁽⁵⁹⁾。

神の国とその正しさとを求める者には、すべてのものが加えて与えられ

(56) マタ 19, 21 ; 6, 20 ; ルカ 18, 22 参照

(57) 箴言 10, 3

(58) 詩篇 37, 25

(59) マタ 6, 31-33

ると主は約束して下さっています。すべては神のものなので、神を有しているひとには何も欠けているものがないのです。もしも自分が神に対して何も欠けているものがないならば・・・王の命令により、ライオンの檻の中に閉じ込められたダニエルは、飢えたライオンの中にいながら、神のみ業によって食物を与えられ、神の人として養われたのです。⁽⁶⁰⁾

またエリアは逃走と孤独の中で、からすが彼に仕え、迫害のさなかにあっても食物を運んでくれる鳥に養われたのです。⁽⁶¹⁾

ところが、ああ何と人間の悪意の残酷さは、憎むべきものでしょう！ 野獣も人の命を惜しみ、鳥も人を養い助けるというのに、人間は罾を仕掛けたり暴力をふるったりするのですから！

22. [我等が人にゆるすごとく、我等の罪をゆるしたまえ。]

この[願いの]あとで、私達は自分の罪のゆるしを願って祈ります：「我等が人にゆるすごとく、われらの罪をゆるしたまえ」⁽⁶²⁾。

食物の援助を願ったあとで、罪のゆるしを願うわけですが、これは神に養われた者が神の内に生きるように、しかも現在の一時的な生命だけでなく、永遠の生命も配慮していただくためなのです。永遠の生命へは、罪をゆるしていただかないかぎり、入ることが出来ないのです。主は罪のことを「負い目」[負債]と呼ばれ、福音書のなかでこう述べておられます：「お前がわたしに願ったからこそ、あの負債を全部ゆるしてやったのだ」⁽⁶³⁾。

私達は罪のゆるしを願うように強く促され、神からゆるしを願い求めている間に、心は自分の良心[罪を犯したということ]を想起しているので、自分が罪びとであると忠告されることは、私達にとって何と必要なことであり、また何と先見の明があり、また有益なことでしょう！

(60) ダニエル 6, 16-23 参照

(61) 列王上 17, 6 参照

(62) マタ 6, 10-13 参照

(63) マタ 18, 32

自分は罪がない言って誇ったり、得意になったりして、さらにひどく腐敗しないように、人は毎日自分の罪を犯すことを示され、教えられて、それによって毎日自分の罪のゆるしを願うように命じられているのです。

使徒聖ヨハネもその書簡の中でこう戒めています：「私達は、自分に罪がないというなら、みずからを欺いており、真理は私達の内にありません。私達が自分の罪を公に認めるなら、神は誠実で正しいかたですから、罪をゆるしてくださいませ」⁽⁶⁴⁾。この書簡の中で、彼は「罪のゆるしを願うべきこと」と「願う時に許しをいただけること」を結び合わせています。

主は誠実な方であるから、罪をゆるす約束も忠実に守って下さると、彼は言っているのです。というのも、自分の罪と負債のために祈るべきことを私達に教えられた主は、父のあわれみとゆるしも与えられることを約束されたのです。

23. [自分の計りではかられる]

主は確かな条件と約束をもって私達を拘束しながら、明らかにひとつの規定を追加されたのです。つまり、私達自身がまず自分に負債のあるものをゆるす程度に応じて、自分の負債〔罪〕もゆるして下さいと願うべきであるということです。すなわち、自分に負債のある者をゆるさないでおい、自分の罪をゆるして下さいなどと願うことは出来ないと承知していなければならないのです。

ですから、主は別な箇所でご言うておられます：「(神は)あなたたちの量る秤であなたたちをお量りになるのです」⁽⁶⁵⁾。

また、主人にその負債を全額帳消しにしてもらった家来は、自分に借りのある仲間を容赦しなかったので、牢獄に繋がれてしまったのです。仲間を容赦しなくなったので、主人からいただいた寛大なゆるしも、彼は失っ

(64) 1ヨハ1, 8-9

(65) マタ7, 2

てしまったのです。⁽⁶⁶⁾

キリストはこのことをその戒めの中で、一層力強く、力をこめて、こう述べておられます：「また、立って祈る時、だれかに対して何か怨みに思うことがあれば、ゆるしてあげなさい。そうすれば、お前たちの天の父も、お前たちの過ちをゆるして下さるのだ」⁽⁶⁷⁾。〔(お前たちがゆるさなければ、天にいますお前たちの父も、お前たちのあやまちをゆくしてくださらないであろう)⁽⁶⁸⁾〕

審判の日には自分自身の判断に基づいて裁きを受け、自分自身がしたことに応じてそれを受け取るので、あなたには弁明の余地などあり得ないのです。

平和を作り出す人であれ、一致して心をひとつにして神の家に住まう人になれば、神は私達にお命じになりました。そして、第二の誕生〔洗礼〕によって私達をそのような者にお造りになって、再生した者として生き続けるようにお望みになったのです。それは私達が神のこどもとして、神の平和の内にとどまり、ひとつの霊をいただく者がひとつの心、ひとつの精神を持ち続けるためです。

ですから、神は一致していない者のいけにえはお受けにならないだけでなく、祭壇から退かせて、まず兄弟と和解することをお命じになります。⁽⁶⁹⁾ こうして神は平和を作り出す者に祈りによって、平和にましますことがお出来になるのです。

神に対する最高のいけにえ、それは私達の平和と兄弟的な一致和合、そして父と子と聖霊の一致においてひとつに結ばれた民にほかならないのです。

(66) マタ 18, 34 参照

(67) マコ 11, 25

(68) マコ 11, 26

(69) マタ 5, 24 参照

24. [大切なのは心であって、いけにえではない。]

カインとアベルが最初にいけにえを供えた時、神がご覧になったのは彼らの供え物ではなく、その心でした。それは、心で神の御旨にかなった者こそが、供え物でも御旨にかなうためでした。⁽⁷⁰⁾

平和を愛する、心正しいアベルは神に対して素直な心でいけにえを捧げましたが、彼は他の人々にも教えたのです。祭壇に供え物を持って来る時には、神への畏敬と素直な心、正義の掟と一致和合の平和を伴って来るべきである、ということ。⁽⁷¹⁾

アベルはこのようにして神に相応しいいけにえを供え、結局、自分自身が神へのいけにえとなったのでした。つまり、主の正義と平和をも持っていた彼は、最初の殉教者としての「血の栄光」によって、主のご受難の先駆けともなったのです。

こういう人達こそ、主によって栄冠を被せられるかたです！ こういう人達こそ最後の日に、主とともに裁きの座にすわるかたなのです！

他方、不和で互いに敵対し兄弟たちと平和を保っていない者は、たとえキリストの御名のために殺されても、兄弟との不和の罪を免れることはできません。このことは使徒聖パウロ⁽⁷²⁾が証言しているとおりです。「兄弟を憎む者は皆、人殺しです」⁽⁷³⁾と記されている通り、人殺しは(天の)み国に至ることもなく、神と共に住まうこともないのです。

キリストよりもユダ〔裏切り者〕の真似をしたい人、そういう人は、決してキリストと共にいることはできません。「血の洗礼」によってさえも洗い清められない罪とは、何という罪なのでしょう！ 殉教によってさえも償いきれない罪とは、何という罪なのでしょう！

(70) 創 4. 3-5 参照

(71) マタ 23, 35 ; ヘブ 11, 4 参照

(72) 1 コリ 13, 3 参照

(73) 1 ヨハ 3, 15

25. [われらを試みにひきたまわされ。]

主はまたこの祈りの中で、「われらを試みにひきたまわされ」と祈ることが必要であると諭しておられます。この箇所では、事前に神のゆるしが無い限り、何も私達に敵対するものなどないということを、示しておられるのです。

それは私達のおそれも献身も注意力もみな、神にのみ集中できるためです。[神からその]権利をいただかない限り、試みにおいて悪魔は何の力も発揮できないのです。聖書の次の言葉がそれを証明しています：「バビロンの王ネブカデネザルはエルサレムに攻めのぼって、その町を囲んだ」⁽⁷⁴⁾。「主はその町を彼の手に渡された」⁽⁷⁵⁾と。

ところで、敵対する悪の力は、実は私達の罪に応じて与えられているわけです。聖書にはこう書き記されています。「ヤコブを奪わせた者はだれか。かすめる者にイスラエルをわたした者はだれか。これは主ではないか。われわれは主にむかって罪を犯し、その道を歩むことを好まず、またその教えに従うことを好まなかった。それゆえ、主は激しい怒りを彼らに注がれた」⁽⁷⁶⁾。

また、サロモン王が罪を犯して主の戒めとその道を離れた時、こう書き記されています。

「こうして主はサロモン自身に対して、サタン〔悪魔〕を呼び起こした」⁽⁷⁷⁾

26. [自分の弱さをわきまえる]

さて、この力ですが、二つの仕方がすなわち、私達が犯した「罪にたいする罰として」と「信仰を証した場合の栄光として」私達に与えられるよ

(74) 列王下 24, 11

(75) ダニエル 1, 1-2 参照

(76) イザヤ 42, 24-25 参照

(77) 列王上 11, 14 参照

うになります。ヨブについての出来事を見ても分かるように、主は明らかにこう言っておられます。「主はサタンに言われた。『見よ、彼のすべての所有物をあなたの手にまかせる。ただ彼の身に手をつけてはならない』⁽⁷⁸⁾」

また主はその福音の中で、そのご受難の時にこう言われました。「上から与えられていなければ、あなたはわたしに対してなんの権限もないはずだ」⁽⁷⁹⁾。

誘惑に陥らないようにと祈る時、私達は自分自身の弱さと無力なことを戒められて、そう祈るのです。誰も横柄に自分を誇ったり、傲慢に何かを自分のために求めたり取ったりすることなく、〔信仰の〕告白においても、苦難においても、自分に栄光を帰することのないようにと願うのです。

主ご自身も謙遜を説いて、こう言われました。「誘惑に陥らないように、目を覚まして祈っていなさい。心ははやっていても、肉体は弱いものだ」⁽⁸⁰⁾。

まず謙遜で従順な信仰告白をして、すべてを神に帰することにより、神に対して畏敬の心をこめて乞い願うならば、主ご自身はその慈しみによって叶えて下さるのです。

27. [われらを悪より救いたまえ。]

これらすべての願いの後で、この祈りの結語として、あらゆる願いと祈りをまとめあげた短い一句で締め括ります。最後に、「われらを悪より救いたまえ」という祈りを置いています。

もし神が私達を救って下さるならば、私達に敵対する敵のいっさいの攻撃に対して、堅固で信頼できる「守り」を私達は持っているのです。「われらを悪より救いたまえ」と祈る時、神が懇願する者に助けを与えて下さる

(78) ヨブ 1, 12

(79) ヨハ 19, 11

(80) マタ 26, 41

ならば、私達にはもうこれ以上願うべきことは何も残っておらず、また願うべきではないでしょう。

ひとたび私達が悪に対して神の保護を願い、そしてそれを得たならば、悪とこの世の私達に対してなすあらゆる反対行為にも確固として、また安全に立っていることができるのです。

この世において神を守りに持つ人にとって、この世にどんなおそろしいことがあるというのでしょうか？

第3部 祈り一般について

28. 「言葉は少なめに」

愛する兄弟達よ。主がこのような祈りを教えて下さったことは何と不思議なことでしょうか！ 主は私達の全ての願いをその教えの中で、ひとつの救いの言葉にまとめあげてくださったのです。

このことは、すでに預言者イザヤによって言われていたことです。彼は聖霊に満たされて神のみいつと慈悲について語っています。「主は正義においてその言葉を完成し、短くされた。全地に対して、その短くした言葉を与えた」⁽⁸¹⁾。

神のみ言葉、すなわち私達の主イエズス・キリストはあらゆる人のもとに来られたのです。つまり教養のある人もない人も同様に集め、老若男女の別なく、すべての人に「救いの戒め」を公にされたのです。主は天の教えを学ぶ者の記憶力に負担をかけずに、単純な信仰に必要なことを速やかに学習できるように、その戒めをととも短くまとめて下さったのです。

こうして、主は「永遠の生命」とは何かについて教えられた時にも、この生命の神秘を優れた神的な簡潔さで包括して、こう言われたのです。「永遠の生命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエズス・キリストを知ることです」⁽⁸²⁾。

(81) イザヤ 10, 22-23 参照

(82) ヨハ 17, 3

同様に、律法と預言者の言葉の中から、第一の、しかも最大の掟を選び出して、こう言われました。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け。我らの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、お前の神である主を愛せよ』。第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛せよ』。法律全体と預言者の教えは、この二つの掟に基づいている」⁽⁸³⁾。

またこうも言うておられます。「人にしてもらいたいと思うことはなんでも、あなたたちも人にしてやりなさい。これこそ律法と預言者の教えなのだ」⁽⁸⁴⁾。

29. [キリストの模範]

主はただ言葉だけでなく、その行いによって、いかに祈るべきかを教えて下さいました。ご自身で度々、しかも熱心に祈り、その模範の証明によって、なすべきことを私達に示して下さいましたのです。

[聖書に]書き記されているように、「彼は人里離れた所に退いて祈っていた」⁽⁸⁵⁾ のです。また、「イエズスは祈るために山に行き、神に祈って夜を明かした」⁽⁸⁶⁾ こともあったのです。

罪の全くなかった主でさえも祈られたのなら、私達罪びとはどれほど多く祈らねばならないことでしょうか！ 主が絶え間無く祈られ、終夜目覚めて祈っておられたのなら、私達はそれ以上に、どれほど頻繁に祈り、終夜目覚めていなければならないことでしょうか！

30. [救いのために祈られて]

しかし主が祈られたのはご自分のためではなく、ただ私達罪びとのため

(83) マコ 12, 29-31；マタ 22, 37-40 参照

(84) マタ 7, 12

(85) ルカ 5, 16

(86) ルカ 6, 12

でした。というのも、罪の全くない方が、どうしてご自分のために祈る必要があったのでしょうか？

主はペトロに向かって言われた時、そのことを明らかにしておられます。「見よ、シモン、サタンはお前たちを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはお前のために、信仰がなくならないようにと祈った」⁽⁸⁷⁾。

そして、後にはすべての人のために御父に祈って、こう言われました。「また、彼らのためだけでなく、彼らの言葉によってわたしを信じる人々のためにも、お願いします。父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人々を一つにしてください」⁽⁸⁸⁾。

主はご自身の御血によって購うだけでは満足されず、さらに私達のために祈って下さったのです。私達の救いのために示された主の慈しみと憐れみはどれほど大きいことでしょうか？

主が祈って下さったのは、何のためだったかを見なければなりません。それは御父と御子とがひとつあるように、私達も全く一致して一つになるのです。このことから、一致と平和を妨げる者がいかに大きな罪を犯しているかが分ります。そのためにも、主は祈って下さったのです。

主の民がこうして救われ、平和のうちに生きることこそ、主のお望みになるところなのです。というのも、不和な者は神の国に入れなことを、よくご存じだからです。

31. [心をこめ、注意を集中して]

愛する兄弟達よ。私達は祈る時に「起立」しますが、これは自分の祈りの内容に心をこめ、注意を集中させるためです。肉と世俗の邪念を退け、祈りの中身以外のことは考えないことです。

(87) ルカ 22, 31

(88) ヨハ 17, 20-21

そのため、司祭は〔聖体祭儀の〕「奉献文」にはいる前の「叙唱」で、兄弟たちに「心を天にあげよ！」と言い、人々は「我れらのこころ主に挙げ奉る」と応答しながら、主以外のことは何も考えないようにするのです。

私達の心は、敵対者には固く閉ざし、ただ主にのみ開きましょう！ 祈る時、神の敵が近寄って邪魔しないようにしましょう！ この敵は頻繁に忍び寄っては侵入し、巧みに欺いて私達の祈りを神からそらしてしまいます。こうして、真面目な意向をもって、声ばかりでなく心と精神を集中して祈らねばならない時に、心で思うことと口に出して唱えることを、ちぐはぐなものにするのです。

神に祈りをささげる時に、神と話すことよりも大事な、ほかの考え事があるかのように、くだらない世俗の思いで心を散らし、気を紛らわせるとは、なんとという不注意でしょう！

わたしたちは自分がしている祈りを自分でさえも聞こうとしないのなら、どうしてそんな願いを神に聞いて下さるように要求するのでしょうか？ 祈る時、自分のことを思い出させないのに、どうして神が思い出して下さるように望めるのでしょうか？

これこそ、敵に対しては全く警戒を怠る不注意なことであり、また神に対しては祈りの時にそれらをおろそかにして、神のみいつを侮辱することなのです。こういうことは、目だけは開いていても、心は眠っているようなものです。

しかし、私達キリスト者は「わたしは眠っていたが、心はさめていた」⁽⁸⁹⁾というあの雅歌の作者が教会について語っているように、たとえ目を閉じて眠っていても、心では目覚めていなければなりません。

使徒聖パウロも熱心に、注意深く戒めて言っている通りです。「ひたすら祈りなさい、そして祈りに気を付けなさい」⁽⁹⁰⁾。心をこめて祈っていること

(89) 雅歌 5, 2

(90) コロ 4, 2 参照

を神に見られる人は、その願うところも神から聞き入られるということを、明示し教えているのです。

32. [よい行いに基づく祈り]

しかし、祈る人は実りのない無駄な願い事を神にもって行かないようにしなければなりません。実りのない祈りをいくらしても、求めることに効果はないのです。実を結ばない木は、切り倒されて火に投げ込まれるのです⁽⁹¹⁾ から、実りのない言葉も何の実りももたらさないものですから、神の報いを受けるには値しないのです。

そこで聖書は私達にこう教えています。「断食と施しをもってする祈りは良い」⁽⁹²⁾。

審判の日に、私達の行いと施しに対して報いを与えて下さる主は、この世においても良い行いを伴った祈りをしに来る人を、慈しみ深く聞き入れられる方なのです。だから、百人隊長コルネリオが願った時も、その願いは聞き入られるに値したのです。彼は「人々に多くの施しをし、よく神に祈っていた」のです。そして祈っていた彼の傍らに〔ある日の〕午後3時ごろ、神の使いが入って来て立ち、彼の良い行いを証明して、こう告げたのです。「コルネリオよ、あなたの祈りと施しとは、記念として神の前に上げられました」⁽⁹³⁾。

33. [神への芳しい香りである良い行い]

私達の働きの功德を伴った祈りを捧げる時、その祈りは速やかに神の御前に上がるのです。天使ラファエルはトビアの絶えざる祈りと不断の善業の証人として、こう言っています。「神のみわざを人々に示し、宣言するこ

(91) マタ 7, 19 参照

(92) トビト 12, 8

(93) トビト 10, 3-4

とは誉れあることである。あなたとサラが祈った時、わたしはあなたがたの祈りの記念を神の栄光のみまえに運びました。あなたが死者を直ちに埋葬する時にわたしは側にいたのです。また、食事をさしおいて死者を日中自宅に隠っていた時にも、わたしはあなたを試すために遣わされました。そして神はあなたとその義嫁サラを癒すために、今もう一度遣わされたのです。わたしは神にお仕えする七天使のうちのひとり、ラファエルです」⁽⁹⁴⁾。

イザヤによって主は同じことを私達に教え、勧めてこう言われる。「悪のわなをほどき、くびきのひもを解き、しいたげられる者を放ち去らせ、不正な契約の証書を引き裂きなさい。また飢えるたる者にあなたのパンを分け与え、さすらえる貧しい者をあなたの家に入れ、裸の者を見てこれに着せ、自分の骨肉を軽んじてはならない。そうすれば、あなたの光りが暁のようにあわれみ出て、あなたはすみやかにいやされ、あなたの義はあなたの前に行き、主の栄光はあなたを取り囲む。またあなたが呼ぶ時、主は答えられ、あなたが叫ぶ時、『わたしはここにおる』と言われる」⁽⁹⁵⁾。

主は約束して下さいます——悪の罟を心からほどき、神の掟に従って神の家族の一員に施しをする人々に、神は共におられるばかりでなく、その人の祈りも聞き入れ守って下さる、と。つまり、神の掟をどのように行うかを聞き分けることによって、自分の祈りも神に聞き入れてもらえるようになったわけです。

使徒聖パウロは苦しい欠乏状態の時に、兄弟達から助けられ、善業は神へのいけにえであると言いました。

「そちらからの贈り物をエバフロデイトスから受け取って満ち足りています。それは、香ばしい香りであり、神が喜んで受けてくださるいけにえです」⁽⁹⁶⁾。

(94) トビト 12, 7 : 12, 12-15

(95) イザヤ 58, 6-9 参照

(96) フィリピ 4, 18-19

というのも、貧しい人をあわれむことは、すなわち「神に貸すことであり」⁽⁹⁷⁾、身分の卑しい人に与えることは、すなわち神に与えることであるのです。こうして私達は霊的な意味で、神に対して芳しい香りのいけにえをささげているのです。

34. [祈るための特別な機会]

祈りをするとき、「信仰の勇者」であり「捕囚の身の勝利者」であったダニエルと共に三青年が、第3時、第6時、第9時〔現在の9時、12時、15時に相当する時刻〕に祈ったことを私達は知っています。このことは、後世に明らかになった三位一体のしるしともなっています。

第1時から第3時までの時間は三位一体の完成した数を示し、第4時から第6時までにも、もう一度、三位一体を告げ知らせ、第7時から第9時の時間が終わるまでは、完全な三位一体を3時間毎に数えることができるのです。

昔の礼拝者達は、祈りのために霊的に決められたこの時間の区分を定め、適当な、時間帯として守ってきたのです。昔の正しい人達が神礼拝のために用いていたこの時間の区分が、かつては神秘であったものを後に明らかにすることにもなったのです。

第3時には、弟子達に聖霊がくだり、主の約束された恵みに満たされたのです。⁽⁹⁸⁾

またペトロも第6時に、屋上へのぼり、そこで神の声としるしを受けて、先に異邦人の洗礼について疑いを抱いていたが、すべてのひとを救いの恵みに導くことを教えられたのです。⁽⁹⁹⁾

さらに第6時には主が十字架につけられ、第9時迄おん血を流して私達

(97) 箴言 19, 17 参照

(98) 使行 2, 15 参照

(99) 使行 10, 9 参照

の罪を洗い清めてくだり、⁽¹⁰⁰⁾ そして生かすために、ご受難によってその勝利を完成させられたのです。

35. 「朝な夕な——たえず祈る」

愛する兄弟達よ。昔の人が守って来た祈りの時間帯のほかに、今は回数においても典礼の数においても、祈りの数が増えてきました。たとえば、朝早く祈りをしますが、それは主の復活を祝うためです。このことについては聖霊が詩篇の中で、こう指摘している通りです。「わが王、わが神よ。わたしの叫びの声をお聞きください。わたしはあなたに祈っています。主よ、朝ごとにあなたはわたしの声を聞かれます。わたしは朝ごとにあなたのためにいけにえを備えて待ち望みます」⁽¹⁰¹⁾。

また主は預言者の口をもってこう語られます。「朝まだきに彼らは目覚めて言う『さあ、わたしたちは主に帰ろう！』と」⁽¹⁰²⁾。

同様に、夕方、日の傾く頃にも必ず祈りをしますが、それは真の太陽であり、まことの日であるキリストが退かれる時に、私達はその光が再び来らんことを、すなわちキリストの再臨を祈り願うのです。この再臨によって永遠の光の恵みが私達に与えられるのです。

聖書はさらに、詩篇の中でキリストが日と呼ばれることを告げて知らせています。「家造りらの捨てた石は、隅のかしら石となった。これは主のなされた事で、われらの目には驚くべき事である。これは主が設けられた日であって、われらはこの日に喜び楽しむであろう！」⁽¹⁰³⁾

預言者マキラもまた、キリストについて「義の太陽」と呼ばれることを証言しています。「しかしわが名を恐れるあなたがたには、義の太陽がのほり、その翼には、いやす力を備えている」⁽¹⁰⁴⁾。

(100) マタ 27, 45；マコ 15, 33；ルカ 33, 44 参照

(101) 詩篇 5, 3

(102) ホセア 6, 1 参照

(103) 詩篇 118, 22-24

(104) マラキ 4, 2

聖書の中で、キリストは真の太陽であり真の日であると言われているのですから、キリスト者にとっては、神を礼拝しなくてもよい時間など片時も無いのです。こうして私達は一日中、祈りと祈願をもってキリストの内に——すなわち真の太陽であり、真の日であるキリストの内に——過ごすべきです。そして自然の法則に従って夜がやって来ても、祈る者にとって夜の闇は何の妨げにもならないのです。というのも、光りの子にとって、夜さえも昼だからです。⁽¹⁰⁵⁾

心の中に光を持っているならば、光の無い時などあるでしょうか？ キリストが自分の太陽であり日であるならば、太陽と日が無い時などあるでしょうか？

36. [永遠を垣間見る、たゆまない祈りを]

ですから、キリストのうちにある者、すなわち常に光のうちにある者は、たとえ夜中であっても、祈ることをやめてはなりません。

やもめのハンナはこのように祈り、絶えず目覚めて、神の報いを受けるのに相応しい者となるように忍耐していました。聖書にこう書き記されています。「ハンナは神殿を離れず、断食したり祈ったりして、昼も夜も神に仕えていた」⁽¹⁰⁶⁾。

まだ光を受けていない異邦人も、このことを考えてもらいたいものです。また光りに見離されて暗闇のなかにとどまっているユダヤ人も、見せてあげたいものです。

愛する兄弟達よ。常に光りのうちにある者よ。受けた恵みによってそうなり始めたことを固くまもっている者よ。夜を昼と考えるようにしましょう！ 私達は常に光りのうちに歩んでいることを信じましょう！ そして逃れて来た暗闇に妨げられないようにしましょう！ 夜の間にも祈りを怠

(105) 詩篇 139, 12 参照

(106) ルカ 2, 37

らないようにしましょう！ 祈りの時を怠慢と不注意のために浪費することのないようにしましょう！

私達は神の御慈しみにより、聖霊によって新しく創造され、新しく生まれた者なのですから、いつの日にかそうなる状態を模倣して参りましょう！

天の国では夜の介入はありません。あるのは、ただ昼だけです。ですから、夜にあっても光りのうちにあるかのように目覚めていきましょう！

私達は永遠に神に感謝し、祈りを捧げるのですから、この世にあるうちにも、絶えず祈り神に感謝をささげて参りましょう！ (完)

II. 『主の祈りについて』の注解

—キプリアヌスとユダヤ人について—

本書の10章、13章、36章中に度々出てくる「反セミティックな」つまり「反ユダヤ」的な表現は、パティカン公会議後の現代人には、いささか奇異に感じられるかもしれないが、その辛辣な表現は歴史的かつ精神的な背景を踏まえて、正しく理解されなければならないと思う。E.ボニンの解説からいくつかの要点にまとめて紹介しておきたい。

1) ユダヤ教会の会堂とキリスト教の間の緊張関係は「ナザレトのイエズス・キリストの御名による」教えを使徒達が宣言し始めた瞬間から生じたもので、弟子たちが「キリストの神性」を宣言することはユダヤ教徒にとっては一神論への攻撃であり、「キリストがメシヤである」という主張はイスラエルの民の誇りを傷つけるものであった。従って、会堂の指導達は使徒達を威嚇し、拘置し、追放し、ついには殺害するまでに迫害したのである。こうして80年にはキリスト教はユダヤ教から異端分派として破門された。

2) その間に、新訳聖書が書かれたが、人間的でありまた神的でもある聖書には、両者の緊張関係が記されている。しかしイエズスの「敵を愛し、迫害するものたちのために祈りなさい」(マタ5, 44)と言われ、聖パウロ

もユダヤ人は神から切り離されてはおらず、神の賜物と召し出しとは取消されないものだと述べているばかりでなく、「わたしの兄弟たちつまり血縁上の同胞のためならば、キリストから離され、神から見捨てられた者となってもよい」（ローマ 11, 28-29：9, 3 + 11）とさえ言っているのである。初代教会のユダヤ人に対する態度は、このように「明確なけじめ」をつけると同時に善意に満ちていたのである。

3)ところが不幸なことに、100年頃から護教論者が輩出しはじめ、もうひとつの態度が目立つようになった。つまりユダヤ教への改宗の恐れと、教会内のユダヤ人勢力への恐れ等から、人々は「善意」を忘れ、徹底的に「けじめをつけること」にのみ熱中し、全面的な反対の態度をとるようになっていったのである。

そこで彼らは聖書を調べて、イスラエル人が不忠実であったがために、神からの使命を失ってしまったということを証明するテキストを捜し出そうとしたのである。そこで、ヨハネ福音の“hoi Ioudaioi”（ユダヤ人達）という語を当時のエルサレムにいた数人の律法学者やファリサイ派の人達、長老、司祭長にあてはめるかわりに、ユダヤ国民全体にあてはめてしまったのである。こうして護教論者たちは、この出来事を神からの非難のしるしと誤解したのである。ユステイヌス Justinus 以来、ユダヤ国民の不運の理由を「キリスト処刑の罪の代償」と見做す考えが、長い間続くことになった。

4)キプリアヌスが入信した頃(245年)の教会内の雰囲気はこのようなものだったので、彼もまた先人達や同時代の人々に倣って、聖書を武器にして反ユダヤ・キャンペーンに加担したとしても、それほど不思議なことではないのである。彼の著作のひとつである *Testimonia ad Quirinun*「クイリーヌス宛の証言」の3分の2はユダヤ人非難のための旧約聖書の引用句集である。そして本書においても、前述の通り数か所にその傾向が見られるわけである。

5) その後のトレント公会議後のカテキズムでは「キリストの死の責任は

ユダヤ人よりも、むしろ我々にある」と宣言し、彼らはキリストのことを知っていたなら、彼を十字架につけたりはしなかったであろうが、キリストを知っていると宣言している我々キリスト者は依然として彼に暴力を振るっていると、第1部第4項で述べているのである。

この宣言を経て第2バチカン公会議になって初めて、「キリストの受難の責任は当時のユダヤ人全員にあったとか、今日のユダヤ人にあるとか言って非難することは出来ない」と言明して、彼らの行いが当時の一部の指導者とその追随者によってなされたものであると認め、この問題によりやく決着がつけられたのである。従って今後は、「ユダヤ人は神から切り離され、呪われている」などと、それがあたかも聖書に基づく見解かのように言うべきではない。こういう考え方は聖書の真理と教会の精神に調和しないものである。現代の教会は過去の教父たちを含めて、いかなる時代の、いかなる文献であれ、ユダヤ人攻撃の憎悪や迫害、反ユダヤ的表現を遺憾に思うようになったのである。

III. キプリアヌスの『主の祈りについて』の参考文献

1. Hartel, *Corpus scriptorum ecclesiasticorum*, (vol. 3, 1 [1868] 265–294.
2. *Ante-Nicene Fathers*, 5, 447–459.
3. J. Bear, *Bibliothek der Kirchenvater*, 34, (1918) 161–197.
4. E. Bonin, *The Lord's Prayer. A commentary by St. Cyprian of Carthage*, 1983.

あとがきにかえて

「主の祈り」はマタイとルカの福音に掲載されていて、キリストの教えの中心をなすものである。しかし、その後、初代教会の文献にはあまり頻

繁に取り扱われてはいない。キプリアヌス以後「主の祈り」について言及している教父は多いが、アウグスティヌス、アルベルトウス・マグヌス、トマス・アクイナス等現代にいたるまで、学術的なものから黙想書的なものまで、様々なかたちの解説がなされている。

キプリアヌスの著作の中には、彼の先輩格にあたるテルトゥリアヌスの思想を反映しているものが多いが、時にはその引用や引喩の形までそっくりなことがある。そのため、彼は時々、師匠テルトゥリアヌスの模倣者と見做されがちである。この『主の祈りについて』も「テルトゥリアヌスの『祈りについて』に似ている」という批評がなされているが、確かに、全体を3部に区分するやりかたは似ていると言えよう。しかし、その両者の内容はかなり違っている。たとえば、テルトゥリアヌスの著作では、「祈り一般について」が理論的に取り扱われて、その中で「主の祈りについて」も2章から8章までの間で言及されている（全体のわずか4分の1程度である）が、キプリアヌスの著作では7章から27章までかけて（全体のほぼ3分の2に相当する箇所）「主の祈り」に焦点が絞られていて、しかもきわめて司牧的、実践的な面が強調されているのである。

このたびの翻訳にあたっては、その司牧的、実践的な面をなるべく分かり易く、しかも簡潔な文章に和訳するよう工夫をこらしたつもりである。キプリアヌスのラテン語文体の特色は、長文で（たとえば、17章の原文は、たった2つの長い文章で書かれていて）修辞学的な構成も強調・並行・類比・引喩・警告等を駆使して、なかなか複雑なものが多いのである。最上級形の形容詞とか、同意語の羅列とか、日本語になおすと煩雑な印象を与えるものは、ふつうの表現にあらため、文章の中心をなしている考えを的確に捕らえやすいようにした。

構成は極めて単純で、全体は1-36番までの番号付の文章が並べられているだけで、区分も見出しもいっさい付いていない。しかし、このたびの翻訳では、読者の理解を助ける意味で E. Bonin [*The Lord's prayer. A commentary by St. Cyprian of Carthage*, 1983] のやり方を参考にしながら

ら各章の「小見出し」を付け、全体も3部に区分して、内容の理解に役立てることとした。

Summaries

Cyprianus, *De Dominica Oratione*.
Translation with a commentary

Kiyoshi YOSHIDA

The Lord's Prayer was composed toward the end of 251 or the beginning of 252, immediately after Cyprian had finished *The Unity of the Catholic Church* and when he was still intensely preoccupied with the idea of unity. As a result, his commentary on the Our Father is filled with echoes of the early work. This alone would give it a unique ring.

For his outline he went to Tertullian's *De Oratione*, from which he borrowed the threefold division— but little else. This latter fact is hardly surprising, since Tertullian's is a disciplinary work, whereas Cyprian's is a pastoral one, and since Tertullian's treats of prayer in general and almost incidentally comments on the Lord's Prayer, whereas Cyprian's works quite the other way around. These differences allow Cyprian to probe far deeper and offer a more comprehensive and compelling treatment. [Cf. E. Bonin, Forword, *The Lord's Prayer*. p. X (1983)]